

麻生路郎★主宰

川 柳 雅 証



No.
247

Pensoj flugas trans la land limon

昭和廿二年七月一日發行
第三卷第二號
（每月一號）

創刊大正十三年・通卷三頁四十七號



續川柳講座 (8)

麻生路郎

花卉草木の句に就て

松山の鑑子君が曾て次男を亡くされた時に、

「と七日二た七日とて秋の花と云ふ句を詠まれたが、愛兒を亡くされた作者の感情が、一ト七日、二タ七日と満潮のやうに段々とかまつて行くさまが感じられ、ホントにしみじみとさせられる句であります。川柳が滑稽や諷刺のすべてであるかのやうに考へてゐる人たちは、この句を味讀して川柳の持つ開口や奥行について知つて欲しいものであります。下五「秋の花」に季感を表はしてゐるから俳句ではないかと云はれる方がありますが、これも知れないが、たとへ季感が表現されてゐるやうと俳句といふ季題が詠み込まれてゐるやうと、この句の全體からうける感じは全く川柳なのであります。

(川柳と俳句とどう違ふか参照) 季題と云へば 福壽草松にしたがひ候かし、 (霞乃)

にしても、もう歸れ〜と花の寺は鳴りにしても、セルとセルしばしチユリツツにしやがみ (海樓)

にしても、俳句でいふ季題が詠み込まれて居ります。福壽草は新年の季題、花の寺の花は櫻の意味ですから春の季題、洋花であるチユリツツも春の季題とされて居ります。しかし川柳は俳句のやうに季題の力を藉りて句意を強めやうとか、句の構成を體形づけやうとか考へてゐる譯ではありません。

直接作句の對象として用ひる場合と、人事に配して情趣を美化させる役割を持つて居ります。植物を詠んだ川柳の大半は俳句でいふ季題が詠み込まれて居ります。しかも所謂季題が二つも三つも詠み込まれてゐる場合があります。従つて同じ句の中に冬の季題と春の季題が含まれてゐることもありますが川柳では季節的に拘泥してゐないので、内容的に矛盾さへなければ論難の對象にはなりません。

「福壽草」の句は作者自身を福壽草に擬し、松を夫としての新春感を述べてゐる女性らしい句であります。女性らしいと云つても較弱を意味しません。

「もう歸れ〜」の句は、春の夕ぐれ、やはらかいものさびしい感じを、かなり巧みに描いてゐるではありませぬか。しかも、もう歸れ〜と擬人法で、ユーモア味も出して居ります。ところが、川柳と俳句との違ふところだとも云へませう。「花の寺」とは櫻で名高い寺のことであり、「鳴り」は入相の鐘が鳴るのであります。そうした省略に就いても深く味つて見る必要があります。

次に植物を詠んだ川柳を少しく例示し、作者の意圖にメスを當て、後人が作句上の資といたしませう。
丹精の菊を何と云はぬ叔母 (大夢子)
ヒヤシンスの音沙汰でなし (霞乃)
落日はトマトにも似てまんまる (路生)
退院に隣へ薔薇をやつて来る (曉風)
恥しき草は矢鱈にむしられる (三笑子)
春の草代議士などに踏まれるな (路郎)
咲くだけは咲くつもりなり (松果)
弟は木の下に居て拾う役 (元山)

満潮は、と云ふといふ落を殘し、まだ〜幾らでもありますが、これ位にしておきます。植物を詠んだ川柳にも、「菊を何んとも云はぬ叔母」の句のやうに、川柳獨特の穿ち味のあることに氣づかれるであります。それが叔父なら何んとか彼とか云つてくれば、そこそこでありませうが、菊作りは無關心な叔母にかつては、一トたまりもないことを詠んだのであります。菊作りの主の至んだ顔に眼に見えるではありませぬか。こゝにこの句の生命とすする軽い穿ち味があるのであります。

「ヒヤシンス」の句にも矢張り穿ち味があります。この句は大正末期の作であります。作者は貧しい生活の中にありながら、花を作つて觀賞してゐたのであります。が、今は花を作るところではない、その日を過すパンのことが肝腎だと反省した心境をヒヤシンスを透して表現したのであります。貧しいと云ひながらもまだ〜この句を作つてゐたころには餘裕があつたのであります。近ごろは誰も彼も花を作るところではなかつた、茄子やかぼちやに憂身をやつしてゐるのを見るにつけ、この句の面白さが、浮び上つて來るのであります。

「落日」の句は植物を詠んだといふよりも落日を詠んだ句であります。しかし落日のよさを、あか〜と熱れたトマトによつて表現したのであります。

「退院に」の句は、必ずしもばらに張らないのであります。が、鉢植の花として、この場合薔薇で代表させたのであります。従つてば其のものを詠んでゐるといふよりも、退院の欣びを詠んでゐるのであります。長い憂鬱な病院生活から解放される時には、あれもこれも隣人に與えたい心のおこるものです。

「恥しき」の句はうぶな戀の句だと云へば情景がおのづから浮かみあがつて來るでせう。草が頻りにむしられることに、二人の動靜が手にあるやうに感じられるではありませんか。川柳ではこの句のやうに植物を詠んでゐながら、どこまでも人間の臭ひが、くつついて放れないのであります。

高血圧 動脈硬化 心臓亢進に

ハセスロール錠

10錠 ¥ 15.00 8.30

塩野義製薬

あります。

「春の草」の句は、その昔、西尾末廣代議士が議會で、スターリンの如くと云つたのを、失言だと云つて、シャツアウト食はしたことがあります。そのころの代議士なんていふものは全く國民を餘外にして黨争に寧日がなかつたのであります。作者はそれ等の代議士達を輕蔑しました。そして「春の草代議士」などに踏まされるな」と叫んで自然の雄大さに溶け込んでゐたのであります。

「咲くだけは」の句は、どんな小さな花でも使命を果たそうとしてゐることに作者の眼が、イヤ心か思ひ及んだのであります。作者自身の心境を、花によつて表現したものであります。

「弟は」の句は寫生句であります。木は柿の木か何かであります。斯うした田園風景はいつまでもいつまでも忘れない印象を残すものであります。

「満潮は」の句も矢張り海邊のスケッチであります。この句を讀むと、潮風を感じたり、蟹が穴を見つけて走り込むさまが眼に見えるではあります。植物に興味を持つ作家は前述の句の鑑賞によつてめやすをさだめ試作されたものであります。古川柳の寶典とされる「柳樽」には殆んど植物の句は詠まれてゐないのであります。たま／＼潮が詠んであると思へば、それは筆筈と

して、下駄として詠まれてゐるのであつて桐そのものとして詠まれてゐないと云つた類のものか、それも僅かばかりあるのであります。最も絶無といふ譯ではありませんが佳吟を發見することは出来ません。

敬語を用ひた句

川柳は僅に十七音字の短詩でありますから、用語はなるべく切詰めて無駄な語彙を省略し、齒切れのいゝ句に仕立てねばならぬのであります。殊に、諷刺や皮肉や滑稽や穿ちが本來の内容をなしてゐるのでありますから、一寸考へる敬語を使用する餘地などありませんが、思へないものであります。それで、敬語を用ひた句が、かなりあることに氣づくのであります。以下少しくそのことについて述べて見ませう。

川柳の構成上、敬語を用ひる場合が、眞實心を披露する敬語即ち敬語本來の使用法に據るものと、敬語によつて反つて皮肉やユーモア味を強調する目的のために使用する手法とがあります。例へば、正直であれ親類がみそなはず

(松 郎)

(孤 柳)

窮屈な部屋に思入老い給ふ

(凡 平)

などは前者の例であり、何れも眞摯な氣持で詠まれた句で

あります。しかもそこには軽い穿ち味が感じられ句の内容をしつくりさせてゐるではありませんか。これに反して王の座にまゐりますメロン賣れ残り

(柳川亭)

ストツプがわからんのかと怒り、やは、

の如きは後者の例で、「まします」といふ敬語が、賣れ残つたメロンのみじめさを強調して寧ろ滑稽にさへ感じさせられるのであります。用ひ方によつては敬語も又敬語でなくなり句意に面白く變化を與えるものであります。

「ストツプが」の句にしま

しても、「おこりやは、り」と作者はやんわり大阪辯の敬語でもつて描出して居ります。が、カン／＼になつてゐる交通巡查の態度や顔貌を髣髴させるのに充分でありまして、それが反つて皮肉にうけとれるではありませんか。この句の場合、大阪辯の巧みな驅使によつて句にいのちを與えてゐることを知らなければなりません。ただ巡查が怒つただけ解したのではこの句の面白味は感じられないのであります。

右に述べたやうな敬語の用法以外に、接頭語として、接尾語として敬語を用ひて、その句の味に餘韻や含らみを持たせることもあります。例をあげて見ませう。

お人形の青い目に似た愛戀よ

(路 生)

この句の「お人形」の「お」は人形に對する親しみから來た接頭敬語であります。斯うした接頭敬語は日本語では單に人形に限らず對人、對物のあらゆるものに及んで居ります。殊に物に對する接頭敬語は際限なく例を擧げることが出来ません。

茶と其、實とお茶で萎びてゐる

(栗)

立語おこんにやくから汁が垂れ

(豆 秋)

の句の「お茶」の「お」も「おこんにやく」の「お」も矢張りさうです。紅茶などもお紅茶と云つてゐます。「御飯」の「御」「お米」の「お」、

「お豆腐」の「お」「お錢」

の「お」例は幾らでもあります。これは關東よりも關西の方が甚しいやうであります。それは物を尊重するところから自然に行はれたものと考えられます。一つは飢饉時に於ける物の不足に際して、敬語が拍車をかけて用ひられたのかも知れません。一つは物の賣買によつて生活する商人が、心から物を大切にしたいために生じた敬語だとも思はれます。

接頭敬語を抜きにしては通じない言葉さへ生じて居ります。

す。例へば「おけ」の「お」を取り、「け」と云つたのでは通じないし、「おなら」の「お」をとり、「なら」と云つたのでは通じないやうなものです。

接頭敬語に次いで更に接尾敬語を用ひて、句を生かしてゐることを知らねばなりません。一つの語彙に、接頭敬語と接尾敬語を用ひたものもかなり澤山あります。例へば

お婆さん、事掌に禮を云ふて降り

(茶 生)

異性をば超越してゐるお婆ちゃん

(路 生)

お釋迦、弟子のうそには呆れ果て

(三 面 子)

等の句の中の「お婆さん」「お婆ちゃん」「お釋迦」「お嬢さん」は何れも接頭接尾の敬語で尊嚴にある種の制約と變化を與えてゐるのであります。例句を人物にとりましたが、物に對しても、「お米さん」のやうに接頭接尾に敬語が用ひられて居ります。と云つてこれ等の接頭接尾の敬語を無闇に亂用すると、安っぽい句になつたり、イヤ味の句になつたりして、折角の敬語が反つて句を殺す結果を生じます。





旭川 宮田 不二

又あとで逢へる別れの投げキッス
卵割る手つきも慣れて病上り
顔見せるだけの孝行うらやまれ
供米も濟んだ一家の高笑ひ

大阪市 福田 妄夢

鐵路まつすぐ戀人の住む
ダンサーのある夜聖書を買うて去に
花嫁も少しはいけるやなぎかげ

奈良縣 西垣 錦風

賣喰ひもピアノだけわと子煩悩
急停車自分もころび芋ころび
敗戦の遺物こゝにも兜鍋
竹槍におむつを干してよい天氣
子の寝相畫の野球の形して

大阪市 市場 淺食子

儲け口なにおと吹雪突いて出る
賣喰ひさ僕の和服は既に盡き

あをやき君逝く

遺句として今は悲しき正信偶
吞ましたい客だけれども眼をつむり
女事務歸ればすがる子が二人
本伏せて姑の肩を揉に降り
外食券持つて役者の弟子に行き

名古屋市 吉田 水車

心臓の問題となり沈黙す

花嫁がいびつにうつる鏡です
元だけはとらねばならぬ氷削機
ビカビカとしたものを置くスウベニア

大阪市 須崎 豆秋

警官の血色のいゝことわいな
新聞包みの十萬圓も落ちてぬか
首を吊る枝ぶりなども見て置こう
こんな時えらい坊主が出んかいな

大阪市 竹内 潮花

ネクタイの娘が車窓から飛んで出た
理想みななますのうにきざまれて
眼を伏せて小供のように叱られる
一家みな麥の追肥へ出てお留守

滋賀縣 北川 春巢

子の學資だけの商賣ですと云ふ
新圓曆と云ふでかいパイプなり
御神輿のあばれ給はぬ神酒不足
八十圓もしてゐる諸で下痢をする
逢つてゐる切符女の方が持ち

長女入學

インフレの農家の子へは目をつぶり
今日休みかどサボッタを子に訊かれ

奈良縣 尾崎 方正

他人の戀おでこの奥から靜かに觀
敗けた方が相手見に出る戀敵
物價高戀に生きると言つたけど
喪狀の紙は小さくなつたけど

看護婦卒業の前に

辭めて去ぬ看護婦の首白かりき
大臣が來るので掃除ゆきとゞき

雜・筆・春・秋

自選の練習

武部 香林

路郎文師藝賞受賞記念句會にあ
たり、各題への投句二句に限られ
て見るとこれにしよう、これにし
ようと、今さらながら迷ひ心が起
きる。しかし、これほど自選の練
習になるものはあるまい。それは
ずばりな氣持を絶対に許され
ず、眞剣な自選態度を強制してく
れるからである。あれでもいかに
してあると、出す句が無くなつて
しまふ。しかしこうしてゐるうち
に、何時しか深い川柳三昧の境地
にまで進み得ることは、いとた易
いことである。この境地から初め
て佳吟をものすることが出来るの
では無いが師に選をお任せするの
も好いが時々はこの自選力の
強要を受けるのも好いものである
昭和二十二年六月十日

うき世の表裏

胡桃 人

川柳は時のカケラではなくやは
り諷刺短文學として、自分のみで
なく、第三者に否大衆に「ハ、ハ、
成程！」と判りやすい句である可
きだと思ふ。孔雀のやうに着がさ
清談・商談
お待合せに

社會黨でも

前田 義風子

どんな子供でも我子と思へば可
愛い。雑誌發刊の月々の可愛さが
それである。思出せば昔の雑誌發
刊熱が可愛くなる。

雑誌續刊は子供の太るのに似て
楽しい。

喫みどり

みどりでの商談
運が向いて來る
上六交叉點西北角

つてダンスの花形を見て句にまよ
めたもの、

婦人科へ行くとは見えぬ華かさ

人生の裏面を穿ち得て妙でせう。

白林

手術台醫者が登れば喧し

大阪府 西 尾

栗

親旦那眠れる如く駈引す
なんとつましく尼僧笑ひたり
しやべりまくつて女戀を逃がしぬ

滋賀縣 鈴 木 石 鹿

鹿

地下足袋も揃へ町から嫁いで來

お説教ストの話も少し添へ

收入欄背廣丸帶桐箆司

大牟田 高 田 抱 逸

逸

筍の暮しに向きな夏となり

マル炭の社宅に甥の身をまかせ

内閣を誰れがしやうと種を蒔き

兵庫縣 德 永 雅 美

美

失業者娛樂放送に病をたて

アレーと云ふ聲ほど妓女がらす

雑草にてもよし枯れたくはなし

履歷書もうかく書けぬ野紙の値

官舎とは名のみ盟をうけてあり

大阪市 新 川 博 也

也

歡聲をあげて風呂屋の灯がともり

超過料二階と下でもめており

東京はえゝなお米が安いなり

ニッコリと米の配給云ひに來る

そのうちに何とかなると母氣丈

女學生席をゆづつておかしがり

大阪市 水 谷 竹 莊

莊

宿明はいゝなど思ふ春の風

いゝ仲と知らず間へ席をとり

新世帯漬物石へあまへてゐ

温泉へ閑取引が靴をぬぎ

待呆けの日本髪へ雪が降る

下松市 弘 津 柳 慶

柳

床屋から晴々ど出た再起の日

妻揚子二合五勺とも見えす

捕鯨船待望の中に入港す

賣れ違ひ御免とすげないことを云ひ

もう我慢出來ず失調スキを喰ひ

百倍だ二百倍だと死にもせず

何んとなく心の暗き物の値よ

腰辨は花見のやうに土手で食べ

選舉事務所下戸の驚くお茶も出し

御實の櫻

お握りへばら／＼落ちる櫻茶屋

欠配に人飢え何をなさんとす

伊丹市 岩 崎 柳 路

路

スナツ屋ステッキとショール見逃さず

惜氣なくボマードの艶ノーハット

古本のキワドイとこで破れて居

筆入と箸箱の音で子が歸り

年だなあのだみを巻て肩がこり

㊦と闇値二二通の見積書

病院に何んの手術か名スター

君配給の酒賣らんかと下戸に云ひ

義務的に毎度御乗車ありがどう

七百圓のあとは封鎖の泣き寝入

○

金澤市 安 川 久 留 美

美

錠藥を二粒亭主らしく座す

お婆さんだけ洋服でない夕餉

漬物をバリ／＼富める音でなし

留守番が時計をみてる花曇り

一周忌長所ばかりを思ひ出し

大阪市 橋 本 緑 雨

雨

人生の悲しむべき「死」に通夜
している反面、踊つてゐる、蜀
山人が詠んだ、芽出度い駕と、と
むらいとが摺れちがつてゐる、行く
人と〇〇に行く人といふ「狂歌」
と同じく、うき世の表裏を川柳化
したのに
忌中札ごにジャズの華かさ
といふ一句が生れた。 冬 宵

薬と川柳

吉 田 水 車

「薬」と言ふ隨筆を讀んで見ろ
とこの著者は余程古句を渉りよう
されたと思えて隨所に引用してあ
る。古句が實に當時の風物史とし
て役立つのであるのは愉快である。
單に興味的としても。「人參」の
項では

「人參を錢で買ふのはいぢらしい」
と云う句に對し「人參の効能を信
じ、徳川時代の孝行娘がはした錢
を集めて恐ろしくも高い人參を買
つてある云々」と評されて居る
のも著者らしい観方である。人參
は言ひ程の効きめのあるしろもの
ではなく傳説藥として珍重がられ
たらしい。

シヨウコンサン
黒燒の項では 燒 視 散 と言
うのがあつてこれはフンドシ(視)

の黒燒を粉にしたもので何に効く
かは一寸言へないところ。そして
「材料」がフンドシ故入手難だし
當今は一層入手困難でスフ入り焼
視散でもあればいい方だろうと言
はれて居る。どうせセックス關係
と推量したのでそれならいい句がな
いかと柳柳を一寸くつて見たが今
の所これを詠んだ句は見當らな
い。柳柳に斯うした藥物學上考証
の助けとなる句が澤山ある事は艸
藥氏も度々本誌上にて指摘された
所であるが、文學上からはつまら
ぬものとして取扱はれてゐる川柳
がその發達當時のあらゆる人情風
俗、法制、藝術乃至は歴史の研究
資料となるべき多くのものを殘し
てくれたのは川柳の本質以外にそ
の功績を認めてよいと思う。

高級化粧料容器には断然！
セマキンの……

黒硝子

大阪府大阪市東區長崎町一丁目四番
山 銀 株 式 會 社
電話 堀川四四七番

安産のために

ワダカルシユーム錠

安産メータ・文獻進呈

大阪市大淀區豊崎東通一ノ四六 ワダカルシユーム本舗

近作柳樽

欠配を他所に闇市場の主食品取市悟志
検問所藝の細いのに呆れ 同

選挙風景(二句)

投票をあす家の子の聲も潤れ 同
情實に動かぬ妻の選挙権 同

四月選挙終る

地盤などものかわ黨の組織力 同

新憲法實施祝典舉行さる

きよう佳き日酒も煙草も行き渡り 同

當世娘氣質(二句)

兄嫁の好みと合はぬ靴を穿き 同
ハイヒール野暮な軍靴に腫もくれ 同

上人御來石

おかみそりした俗物へ佛の名石川縣義風子 同

草の芽の脈うつ力天をさし 同

ほろ酔うて田植終つた父である 同

妾宅へこれは家内の知らぬ金 同

金力へ草木のなびく様にあり 同

曼珠沙華故郷の山は變らざり 同

御苦勞とだけで百圓ねじこまれ 同

停電に話題は明治初年頃 同

財産税官家も都落と決め 同

鉢の木の話も今はうなづかれ 同

手土産がすぐ食膳にのぼつてゐ 同

戀文の文句とろく／＼そらんじ 同

博士でもリーベにだけはへこまれ 同

はる／＼と米を運んできた靴 同

足重し代用食の待つ我家 同

自信ある辨當ひらく指定席 同

軍國の匂いを捨てた櫻花 愛媛縣水鏡

父親のない子家計を口にする 同

インフレに墨の黒さなど忘れ 同

ゴシヤ／＼と服にブローチ光つてゐる 同

雪々と看護婦ガラス拭いて見る 同

春の風淡い望みのくじ引いて 同

出しついでそのまゝ人形貸して 同

かるくきく小言へ親は案じてる 同

惜しまれて逝く子へ妻は得心し 同

叩く蚊も逃ぐ我掌の瘦せ過ぎて 同

また茶漬いやいや心持直す 同

喰ふ爲に向ひは淨瑠璃賣つてゐる 同

薄化粧岩波文庫膝にゆれ 同

鐵橋にかゝつてノラの話やみ 同

未亡人海の話になつて泣き 同

學歴で喰へぬ生活へ今日も賣り 同

焼跡の煉瓦拾ひへ黄昏れる 同

停年へ落葉に似たる慰勞金 同

手捲き煙草を口下手にすゝめられ 同

女房の時間認める日曜日 同

毒養生いらぬ病人闇値知る 同

古時計余生を知つた刻みよう 同

犯罪と餓へとの中の子澤山 同

やりくりをしたのか隣も生きとて 同

氷囊もあわれ命のごとくゆれ 同

子を待たたりさらしガーゼの 同

いゝ味と言へば値段を聞かされる 同

相談に乗つてと女凭れる氣 同

復さし柳へ來れば笠でよけ 同

標札を並べて官廳靜かすぎ 同

至急にはもう驚かぬ公文書 同

もう少し上手に引くと鍋がいふ 同



川柳の榮町(金澤)

安川久留美

何十年前か呑鬼樓という川柳人の住んでいた金澤の榮町、今の三十八番地の家敷かと思ふ。スルとその真向いに、現在では「石川縣川柳文化協會」という看板のかゝつた旅籠屋の若主人が、鬼本と名のる川柳人であるのも奇しき因縁だ。呑鬼樓も初めは「鬼友」という碧派の俳人だつたが、後年、俳より、柳に傾いて行つたわけである。師は六華會の元老銀波樓。氣理やりにごん元日になつちまい

という、奮い作を偲ぶ。

○その榮町の一番地に、大きな寄物間屋だつた若主人が、宮本銀砂子。柳誌「百万石」の後期、六〇號を棟屋として發行した百万石社。何と、金澤柳壇全盛時代はこの町で、華やかに消えたのである。

○福懸坊から白令——白林と柳誌を二度替えた森田屋旅館の若主人もやはり榮町。「梅鉢」同人として、新川柳に一生懸命骨を折つた男、最近復活して、金澤中堅派柳人團を牛耳つてゐる。

○今から三十五六年前、東都の川上三太郎氏が來澤して夕立にあり、飛び込んだ宿の名が「不二館」(その後火事のため烏有に歸した)それは、酒造家の老舗「しまや」の東隣、小路の角家ていまは、細川商科の看板がかゝつてゐる。

○白林君の宅に泊つた柳人では、大窪文芳、道柳しん平、大谷五花村、柳山門、今村良之祐、などの人々があり、「川柳クラブ」金澤支部の大会に却々縣外人を集めたのも、もう一ト昔となつた。忘れていたが「玉鬼問」といふ老柳人も泊られた。

○森田屋の直ぐ近所に一年前から「魚安」という割烹の繩のれん式の家がある。主人は西本三笑という、麻生路郎氏の門に一時名句を吐いた川柳人なのである。

○呑鬼樓居の例會には、いつも家の前に川柳會の提灯を出して、出席者を判り易くしたものだ。五十六才の私が、二十才頃の趣味で、よく行つた榮町の川柳會欠かす来た人には、銀波樓森の家、夕星、豊年坊など、幼稚な句を作つていたものである。

○榮町は、電車通りから入つて長い／＼箸箱のやうな町、先月から、川柳雜誌社金澤支部の看板や、「柳人往來」發行所の新しい

美しく生きながら爲に瘦せてゆき 岡山縣火 峯 退學が又一人あり町の子さ 石川縣魯 木
生れ出る子へインフレが案じられ 同 水 パーを出たくわえパイプに夜の雨 京都市螢 雨
名刺差し貯つて課長榮轉し 大阪市斜 水 それがあなたけふ日の百圓でせう 池田市牧 人
藤間流持つて優しく妻に行き 同 兒 賣り食ひの手初めにする女物 岐阜市周 峰
かけ茶碗せめて豊かな湯氣であれ 長野縣柳 同 白魚の指がニキビを取つて呉れ 和歌山惠 風
堀高く世間を甘く見て居らず 同 良 郷土紙はデカく博士等と書き 大阪府神 峰
見舞客どもも蜆を言うて去に 大阪府恒 同 洋装でんねとアツパツバで来て 大阪府時 夫
啄木の詩の底を行くナンバの粉 同 巧 妙な扇止まつて 舞終り 大阪府露 芳
勞務課長を命じられてる 廣島縣露 斗 夏もよし處女ははりきる胸を持つ 大阪府鴨 水
北風のよく當る家に住みなれて 同 台灣の匂ひで歸りや麥みのり 吳 市綠 舟

風鈴

夏の景物の一つに風鈴があります。多くは金屬製で釣鐘の小さなやうなもので舌があり、それに短冊形の紙片をつけ、風につれて鳴る仕掛けのものであります。ガラス製のものもあります。ガラス製のものは一寸安っぽい感じがいたします。釣忍などと一緒に夏の軒端に吊るして涼味をそへるものであります。遅配や欠配で騒いでゐる都市生活者に對して風鈴がどうだとか斯うだとかいふ話はチト暢氣すぎはしないかと云はれるかも知れませんが——イヤ、そうであればこそ、風鈴を持ち出す價值があるのであります。

す。要は心の在り方であり、そりやア、風鈴を吊つて、ジツと下から見上げてゐるところで、空腹が充たされる譯のものでないことは確であります。しかし、朝夕の一時を風鈴に親しめばなんとなく心に落ちつきを與えてくれること、ひるの疲れをこころよい眠りに誘ひ入れて呉れることは間違ひありません。その點風鈴は平和の象徴だと云ふことが出来ます。

ソレ聞だ、ヤレ、インフレだ、遅配だ、欠配だ、主婦の陳情だ、一家心中だ、都市生活者は常にイラ／＼さ／＼してゐますが、風鈴の一つも吊つて平靜な心への轉換をはかることは無意義ではありますまい。市井の哲人であります川柳人は風鈴をどう眺めてゐるか、少しく句を拾つて見ませう。

風鈴よこゝはなはいしよで呑むところ (豆 秋)
ヤミで呑ますとこに、涼味をそへるため風鈴が吊られてゐるのであります。新聞階級の人たちに風鈴の味が判るかどうか怪しいものです。しかし、七・五禁令で、もう風鈴も無駄に音を立てゝゐることです。

風鈴へ且那が米を提げて来る (豆 秋)
と云ふのもあります。風鈴は二號邸をきかしたものです。今時の旦那もなか／＼樂ではあります。風鈴の下でジャガ芋わけてゐる (豆 秋)
ドロがついてたので、日方が少し違ひますがど、ガヤ／＼騒いでゐるのであります。風がハタと止んで

近畿日本鐵道

伊賀・伊勢方面へは のりば 上 六
河内・大和方面へは のりば アベノ橋

看板も掲げられて三十数年川柳の町としてほろびない町になつた。

とが一寸不思議でならない。
(四月二十七日記)

風鈴のたゞざくも動かないのです。暑さが思ひやられます。

風鈴の下で、冷やつこで、チビ／＼やつてゐたのも今は昔のことになりました。戦争さへしなければと今更ぐちを云つてもはじまりません。

風鈴へ冷やつこさへまゝならず (豆 秋)

風鈴の下で、冷やつこで、チビ／＼やつてゐたのも今は昔のことになりました。戦争さへしなければと今更ぐちを云つてもはじまりません。

風鈴に負しい勝をのぞかれる (豆 秋)

風鈴に負しい勝をのぞかれる (豆 秋)

今日は何も配給されなかつたのだ。もう少し膳の上が賑やかになるやう片山さんしつかりたのんまッせといふところでありました。

今日は何も配給されなかつたのだ。もう少し膳の上が賑やかになるやう片山さんしつかりたのんまッせといふところでありました。

次に女性はどう詠んでゐるか一二紹介しませう。

次に女性はどう詠んでゐるか一二紹介しませう。

風鈴屋汗かく荷とは思はれず

風鈴屋汗かく荷とは思はれず

と云ふのがあります。涼し

と云ふのがあります。涼し

註・本稿は七月廿八日早朝、BKの市民の時間にアウンサー氏によつて放送されたもの——原稿執筆者は路郎主幹。

山路閑古

自分ばかりでなく、古川柳界の消息を、新川柳の諸君に傳へる語話管のやうなものがほしいと思つてゐた。その意味の洞友かと思はれるので、その適任であるか否かは問題外として、ともかくも實直に通話管の役を果したいと思ふ。

柄井川柳は前句附の選者であつて、その選を川柳點と稱した。それが略されて川柳となつたのであるから、川柳はもと前句附の稱呼でなければならぬ。

のである。

着眼はよかつたが、吳淩軒はあまり才のない、むしろ實直一點張の人物であつたらしい。高點句をなして人の嫉視を浴びると、御了見々々々云つて逃げたと云はれる。さうして自分でもやはり柄井氏について前句附を作つて居り、「柳多留」中の作品も、新には募集せず、「万句合」として、すでに柄井氏によつて發表せられた前句附の中から専らこれを選び、單に前句を削つて、獨立單句の形として再發表してゐたのに止まる。それが爲に、その素暗ら

吳陵軒の着眼は、どれ程成功したか。これは非常な成功といふべきで、短詩界に一新機軸を開いたのみならず、今日の川柳隆盛の因を作つたと云へる。その當時、建部綾足といふ才物が、同じやうに旋頭歌の半分を削つて、片歌といふものを創案し、實作に理論に、盛んに活躍をなしたが、吳陵軒の成功に比べれば、ものゝ數ではない。吳陵軒編著の「柳多留」は壓倒的の歡迎を受け、前句附も専ら「柳多留」に順應して、これに資料を提供すべく、つひには前句をかなぐり捨ててに到つた。主客顛倒、春秋の筆法を以てすれば、吳陵軒前句附を殺すと云つても不可はないのである。

前句を削つて、獨立單句としたことに、どれだけの意義があるか。これは短詩型詩歌としては、なかなかの英斷である。恰も、風の糸目を切つて、風を空中に自由に飛び廻らせること云ふやうなことを、云ひ出したやうなものである。これは誰が考へても、ちよつと六ヶしいと思はれる。

然るに風は存外うまく飛ぶのである。これでは、後生大事に糸を握つてゐるのが馬鹿臭くもある。いつそ、こちらも糸目なしの獨立單句で行かう。いや、最初に糸を切つたのは、何を隠さう乃公だ、と柄井氏は云ひ出した。

すると、人の好い、實直な吳陵軒は、よろしうございます。先生の御名前にして置きます。先生のと、あつさり柄井氏に功を譲つた。しかし師の名前を出す一方、その發案者は、不才ながらやはり己れだといふことを、暗にほめかしてゐる。その氣持は——林檎ではないが、よくワカル。

川柳の先祖を、柄井川柳にするか、吳陵軒可有にするかといふことは、デリケートな問題である。學者によつて、充分に検討せられることを自分は望んでゐる。

こゝらの消息は、「柳多留」各篇についてある序文を調べて見ると、若干手掛りが得られる。以前に前田雀郎氏が試みられたが、たゞく自分分が、「藍」の古川柳構座で、柳多留五篇序をいちぢつた爲に、又どうの問題が発生した。面白いと思ふ。

添削と批評

本誌では初學者に純正川柳を指導する目的で左記選者に依嘱し通信に依り批評添削の勞を執ることゝした。利用をおすゝめする。

者 選

麻生霞乃先生
西田艸樂先生
市場沒食子先生
米本貴志子先生
武部香林先生

▼添削批評の希望者は本誌の直接購読者であること▼句数は一人一回五句以内のこと▼選者の振書はお任せを願ふ▼返信用封筒に宛先・返信の郵券を貼附、なるべく手数をかけないこと▼会費は一回参画▼句稿は用柳雜誌社サービス部添削と批評係宛のこと。

ペン先・針ビン・セムクリツブ

立川ペン先製作所

上野市

不朽洞會から

▼大森風來子氏(岡山縣)は六月十二日に男子を儲けられ「男三十間屋になれず父となり」の句を寄せられた。▼木下蘭王氏(大阪)は四月の下旬に華燭の典を舉げられたそうであるが、燈臺下暗らして少しも知らなかつた。お欣び申上げる。▼新川博也氏は大阪市都島區東野田六丁目四一(新川ヒロヤ)で藤寫印刷を開業。▼石曾根民郎氏(松本)は七月七日松本放送局から「川柳の話」を放送された。▼弘津柳慶氏(下松)は路郎主幹の西下を聞き、七月十三日の浪の音一周年句會には萬難を排して出席されとのこと。▼橋本縁雨氏(大阪)は墓参のため七月三十日金澤市金石(歸省)。▼戸倉普天氏(丹波)は郷里にあつて食糧

増産に専念されてゐる。▼戸田古方氏は池田(移轉(石橋下車)▼尼縁之助氏(出雲市)は市の商工課長に榮轉された。市長が川柳に理解があるので近く市役所内に川柳會が生れるとの快報に接した。

ラブの川柳會に路郎主幹を迎え「川柳講話の夜」を催された。その夜は大變暑さがきびしかつたので、月夜を幸ひ小学校の校庭に椅子やテーブルを持ち出し、月下にロソクを立て、講話がすゝめられ風趣



に 覚 醒 頭 腦
(公定 醫 藥 品・プロバミン錠)
ゼドリン錠
★睡氣を防止し
★頭を明 快 に す

抱すべきものがあつた。さうである。▼安川久留美氏は相變らず筆マメである。いつでも脚のこと、サケのことが書いてゐる。金澤の風呂賃三〇〇から一七〇に逆戻りイヤ面白くないことだとも書いてある。通信の終りに、「姫トシボ哲しやすらう石の味」といふ句も添えて

新會員紹介

七月
小坂慈雨來氏(堺市)
路郎主幹紹介
増田耕民氏(鳥取市)
鐵洲氏紹介

川柳不朽洞會

指 導 生 路 郎
池 澤 樂 居 洞
長 谷 川 一 徹
笠 原 路 峰
高 嶋 米 濱
藤 村 晴 濱
藤 村 晴 濱
淺 田 退 藏
末 弘 太 郎
中 田 守 雄
白 川 朋 吉

前 田 五 健
柴 谷 幸 二 郎
蛭 子 省 二 郎
西 島 〇 丸
麻 生 葎 乃
高 橋 本 綠 雨
高 鷺 亞 鈍

井 村 寒 光
上 田 翠 志 子
米 本 貴 志 子
大 西 八 步
福 田 山 雨 樓
西 田 里 十 九
永 田 里 十 九
寺 井 銳 一 浪
高 井 白 面 人
石 井 古 方
戸 田 古 方
古 川 山 北 海
古 川 魔 花 麗

岩 崎 山 石
藤 井 友 郎
内 藤 草 一 郎
三 輪 晚 翠
水 谷 鮎 美
村 坂 松 夢 裡
大 坂 佐 平 水
平 佐 至 美 璃
西 川 至 青 美
井 上 湧 三
仲 本 玄 同 子
中 原 鏡 人
橋 本 波 夢 造
石 浦 西 花 園
谷 崎 松 利 代

宮 田 不 二
福 田 錦 夢
西 垣 風
市 場 沒 食 子
須 崎 豆 秋
宮 岡 民 郎
石 曾 根 白 柳
中 西 小 木
正 本 水 客
黑 川 紫 香
竹 内 潮 花
北 川 集
布 施 川 筑 川

尾 崎 方 正
佐 竹 香 附 子
關 根 山 彦
西 尾 不 水
櫻 田 久 米 雄
濱 田 申 仙
好 崎 大 研 子
菊 原 小 松 園
逸 見 燈 竿
清 水 白 柳
鈴 木 九 坡
夷 木 一 笑
鈴 木 石 鹿
高 田 抱 逸
小 川 恒 明
德 永 雅 美

八 竹 正 柳
大 森 風 來 子
河 野 東 子
高 木 勝 東 子
坂 井 楠 水
村 上 井 楠 水
岡 島 角 堂
木 下 幽 泉
中 鐵 無 王
巽 川 島 洲
新 川 村 好 郎
橋 本 博 也
尼 本 美 奈 子
淺 谷 香 之 助
水 谷 翠 莊

熊 本 春 景
山 根 泉 人
小 橋 隆 如
勝 谷 山 川 兒
岡 崎 祥 月
吉 岡 柳 慶
弘 津 鬼 の 子
中 川 溪 堂
吉 葉 鳩 花
稻 葉 雨 來
小 坂 慈 雨
杉 谷 湖 山
增 田 耕 民
淺 田 鴨 水

麻生路郎文藝賞受賞記念

川柳大會旬報

於 生 根 神 社
廿二年六月一日十三時
大會情報、兼題席題の三才吟、
出席者芳名等前號参照

兼題「父」

父に似てゐるなと思つて鼻毛を
さもあらはれ父フロロに
呑めん事ない父の名引出され
復員の父へ子供が逃げ廻り
休職の父盆裁に目を送り
なすまにならざる父の顔
罹災から拍車を掛けて父は老い
一言も云はない父が怖くなり
父ありきそれは懐くだけの人なり
父の居るソ聯もこんな春宵か
意見する父も若さと思ひ出し
父といふ資格は此ることのみか
俺に似て儲けつつかいする子なり
まだ父は生きとりますと禿てる
ゲートルを父へ巻く世を恨み
客として父を迎へたバスガール
父ひとりなかつ告別式すゝむ
夢にまで出てきて亡父のお説教
一寸した事によるこぶ父となり
父親に子供抱かれる順を待ち
酒呑めばさく父のおどき
父の眉苦勞は言はぬ一文字
敗けてから父にわかれぬ事なり
永田町歸れば父の親父なり
謹殿で貧棒で父やせてゆく
氣が向けば父は裸で水を打ち
ぼろだらやぐら父はよせつけ
年老いた父の春を知る段梯子
今にして思へば父の民主主義
お父ちゃん云はれギョッせし哉

兼題「友白髪」 麻生路郎選
二人分空けて貰つた友白髪
友白髪もう争はぬ仲であり
友白髪もう染めること止めに
前後して便所に起きる友白髪
友白髪若く希望をまだ捨てず
共稼ぎあつた昔を友白髪
友白髪むかしを笑ひ合ひ
友白髪全生は孫に捧げる氣
友白髪孫のライカへかきこ
友白髪孫の事からも初め
晩酌も少しつき合ふ友白髪
ひまごの名思ひ出せない友白髪
おかはんの方が達者な友白髪
友白髪明治の歌へお茶を入れ
際本はまだ部屋住みの友白髪
ゴッゴツと云ふて言はれて友白髪
友白髪又一厘の節の事
友白髪同じ趣味もつむつと
功成らず名も達げずして友白髪
友白髪金婚式の膳につき
苦勞した事を忘れた友白髪
友白髪愛の極を見せつける
友白髪がどの孫かわからぬ友白髪
子寶の外は不運な友白髪
跡とりもなく友白髪を貯め
（五）かばわつたはつ晴れの渡り初め
（五）氣が合はぬ氣が合はぬ共白髪
（五）喰べるだけ小作してある友白髪
（五）友白髪一つ眼鏡で事足りる
（五）友白髪一つ眼鏡で事足りる

兼題「恩師」 水谷鮎美選
引揚げの一人恩師も變つてゐ
日に寄業恩師へ便りする机
就職の禮へ恩師のいゝ笑ひ
復員の肩を恩師のいたわられ
乾盃の恩師の臉に光るもの
恩師の應やさしく恐く感じられ
デパートの隅で恩師の個展見る
失敗をした夜恩師へ手紙かく

兼題「祝辭」 市場没食子選
型破りの祝辭相手のうちに降り
榮華の祝辭内助のことにふれ
感激の祝辭原稿紙にあふれ
校庭の祝辭へ秋の空が澄み
モーニングが立つて何やら祝辭云
祝辭の祝辭へみんな下を向き
祝辭にも馴れて停年より近い
ザツクパランを祝辭も披露
調子になる祝辭の中の人柱
飛入り祝辭司會を喜ばせ
祝辭をやれと吞まされてゐる
サンプルを持つて祝辭をのこる
お祝の言葉日柄もはめて置き
通譯がついて祝辭に聞かぬ
世話役は祝辭を遠く聞かぬ
祝辭聞く方もうれし力痛
（五）長い祝辭に軽く咬ばら
（五）もうやめてほしい祝辭がまた續
（五）お祝辭が親の光りとも知らず
（五）友情の祝辭みがかいまやよし
（五）祝辭中になど同じとあり
（五）喝采の中に祝辭を讀み終り
（五）反響祝辭へ勇らし立ち
（五）左遷組祝辭一つでほり出され
（五）パツチ光る其の日の祝辭また光
（五）脱線祝辭いさゝか酔ふてゐる

兼題「温泉」 清水白柳子選
母連れて湯町不粋な客となり
何不足ない温泉で胃を害れ
元湯からつばめと共に引返し
温泉街値下げ運動とり合はす
湯治する俺にみじき部屋音
温泉へ行く約束の妻と老ひ
山の湯の夜は更け易い加賀さ
温泉で米が足りないロケション
湯の宿に残る草履の無分別
電灯の暗き温泉敷きそうな
温泉敷きをこころよく湯の霧
湯書にもならず温泉の宿一人旅
温泉で續篇を書く戀愛記
温泉の湯氣へ一人はたくまじ
温泉場すでにヤミ屋と見られ
湯の街へ病人らしい顔は来す
湯の町の道を歩けばますます
（五）昨日の記事を讀むもの温泉地
（五）若魚にも飽きて湯治に雨を聴く
温泉の隅に明治の流行歌
温泉へ今度は妻をつれて行き
温泉に来て株だけ聞いてゐる
温泉の宿で終止符をうち泣いて
温泉も一人である馬鹿の様
還りてゐる温泉のありがた
温泉の二人はつとまる間あらは
温泉の宿は氣がききまて一寸
温泉で人情に飢え寒うゐる
商刷子を裸で使ふ温泉場
温泉の宿で五日並べも飽きて
温泉の湯の街此處も焼野原
温泉の隣部屋にも米の音
妹に戀をゆづつてお湯の街
湯の宿で職場の知れる口をき
温泉に浸り心癒ちと變り
温泉場ひとり旅になれてゐる
温泉につかつて都會想ふまい



六號室

▼やりつばなしのせんざいに、一本の南瓜が石燈籠を中心にひろがった、黄色い花がつく。青々とした葉っぱが仕様に寝た目をよるこぼせる。きりぎりすが何處からか来て、しきりに鳴く。いつの間にやら小さな南瓜が一つ葉影に轉るがつてゐる。これも燈都の風景である。▼編輯をしてゐる者にとつて、雜誌の好評を耳にすることは何物にもかえがたい欣びであつて、行きました。と云ふ駐進が這入る。十四サツで釣銭がなかつたにしても、手を引つ込めなかつたことは感謝してゐる。▼配本係に「五回では安いですよ」と折紙をつけてくれた眼の高い本屋さんもゐる。斯くして本誌は伸びつゝある。一層の支援をのぞんでやまない。▼本誌へ「古川柳」を主宰されてゐる山路閑古氏が「古川柳の立場から」を寄せられた。味讀を乞ふ。▼山形縣西置賜郡豊原村大字中の愛柳社では、来る十月五日に復活二十周年愛柳社報創刊記念の全國川柳大會を開催されることとなつた。課題は「人」五句、私も選者の一人である。詳しくは同社へ。▼龍寶寺再建賛助會とかいふ會から印刷ビラが來た。一讀すると僕が發願人の一人にされて寄附を勸誘させられてゐる迷惑な話だ

寺院や神社の寄進の勸誘は禁止されてゐるので、すぐにことわつておいた。▼六月一日の大會に病を押して出た私はその後も引續いて臥床、のつびきならぬ會や用務に出かけては病狀を更に悪化させて七月上旬まで臥床が續いた。そのため八坂坊を思ふ會にも大井正夫氏から案内をうけたが止むなく不參した。▼元、川維高知支部の幹事だつた中澤濁水氏が亡くなつた謹んで悼む。▼浪の香川柳社の一周年記念川柳大會が、七月十三日午後一時から山口縣久賀町の藤井製材所の階上で開催された。招かれて西下、熱辯を一席やつた。瀬戸内海の一孤島に清水、京都、大阪、廣島、吳、防府、下松、光の諸市から川柳人雲の如く集るといふ盛會ぶり。世話好きの亞人氏が終始ニコニコしてゐながら人も波らさぬ統制ぶりだ。盛會も故なきでない。「浪の音」は亞人氏を中心に、不二、來駕の兩氏がこれを援け、三休、朗々、猪太郎の諸氏が堅陣を張つてゐる。▼東都柳人の有志で川柳人クラブが結成された。(東京都台東區豊住町十一山路星文洞方)むづかしいことは抜きにして川柳のためになることなら何でもやらうといつた集ひださうだ。西島○九氏が代表に推され、幹事は吐月峰、啞三味、巨郎、三笠、星文洞、琴莊、四方、六佳史、盈光、太郎丸の諸氏。▼新憲法實施記念川柳會を本社主催で五月四日生根神社で開催した。▼瀧寺支部では五月三日午後六時半、十七日六時半に諏訪の森會館で開催。▼扶桑金屬文化部川柳會が五月十六日午後四時から開催された

募集

每號募集 (毎月五日締切)

近作柳樓雜吟廿句 麻生路郎選
川柳塔(雜詠) 麻生路郎選
文章(評論・研究・感想其他)

投稿規定

▲投稿は各種必ず別紙に認め、住所氏名雅誌を明記する事。
▲「近作柳樓」は一般作家の雜吟を募る。
▲「川柳塔」への投稿は不朽會員に限る。
▲投稿其他につき御問合せはすべて返信料封入の事。

された由、▼岩城川柳社(石川縣小松)では五月廿五日に再出發の初句會が開催された。▼日本古川柳學會から山路閑古氏主宰の「古川柳」が創刊された。定價一部八圓郵税一圓二十錢。發行編輯所は東京都南多摩郡由木村鎌水、萩原時夫氏方。▼柳人往來五月號石川縣下の川柳會報の報道機關、金澤市榮町六六石川縣川柳文化協會。

▼川柳ビル五月號京都市上京區堀川通樫木町川柳ビル社。▼「百樹翁追想錄」が七月下旬に刊行された。勝寫版半紙半載判袋綴五四ページ。遺愛をついだ金子春風氏の「病臥中の翁」によつて死の直前の生活が判るのはいふれい。

▼「川柳大陸」を主宰してゐた高橋月南氏が五月二十二日山形縣の郷里へ再引揚の途次、奈良縣のむつみ社に立寄られることになつたので同日むつみ社を訪問、月南夫妻と夕刻まで歡談した。その後、同氏は凡々氏のあつてんで診療所に勤務されることとなつたのである。▼橋本言也氏(門司)の母堂が八十四歳の高齡で五月三十日に永眠された。謹んでお悼みする。▼相元紋太氏(西宮)の四女であるが五月二十二日に亡くなられた謹悼。▼種瓜平氏(大阪)は七月二十一日に次女百枝さん

んを儲けられた。▼吉川枝葉氏は吳市阿賀小學校内住宅へ。▼庄万よし氏は大阪市阿倍野區阪南町西一丁目二六へ。▼竹田折平氏は大阪市交通局自動課器材係長に榮轉された。(路)

阪田膽寫版

二五町田芝區北市阪大

會商田阪 株式會社

番九三六一 島福 話電

B列5號 毎月一回一日發行
川柳雜誌 第二卷 第三號

一冊 金五圓 (送料七拾錢)

半ケ年概算 金四〇圓

一ケ年概算 金八〇圓

昭和廿二年七月廿五日印刷

昭和廿二年八月一日發行

大阪市住吉區萬代町五丁目二五番地

發行所 川柳雜誌社

大坂市住吉區萬代町五丁目二五番地

發行所 川柳雜誌社

大坂市住吉區萬代町五丁目二五番地

血圧降下には
アークレミン

血管アウトホルモンとアミン塩類

